

# EAJ NEWS

## 2026年プロジェクト特集号

No. 207  
April 2026

(公社) 日本工学アカデミー広報委員会  
Office : 〒101-0064  
東京都千代田区神田猿樂町二丁目7番3号  
HK パークビルⅢ 2F  
Tel : 03-6811-0586  
Fax : 03-6811-0587  
E-mail : academy@ej.or.jp  
URL : <https://www.eaj.or.jp/>



### EAJの政策提言への取り組み

政策提言委員会委員長 倉持 隆雄 / TAKAO KURAMOCHI

2026年プロジェクト特集号として政策提言委員会の活動状況やプロジェクトについて報告する機会をいただき感謝申し上げます。今年の特集号では、現在進行中の6件のプロジェクトのなかから、「海洋プラスチック研究」、「社会、産業、人々の生活の変容を支える電力システムの在り方」、「人類の安寧とより良き生存」を目指した工学倫理と工学教育」について報告いただきます。

昨年度政策提言委員会は、新規テーマの検討、進捗の確認等を行い、2件の新規プロジェクトを開始しました。また、関係各位のご尽力により、昨年2月に『5G/6G時代のAI活用戦略』プロジェクトならびに「生成AIをはじめとしたAIによる社会変容とリスクマネジメントに関する調査研究」、8月に『来たるべき未来の工学倫理と工学教育に関する調査研究』の2件の成果報告書が公表されました。

政策提言委員会では、会員の皆様から提言テーマや問題意識を募って具体化する取り組みの一環として支部活動との連携を重視しています。各支部におかれては、重要なテーマを巡る講演会などを積み重ねてきておられ、そのなかから政策提言につながる課題が浮かび上がることや地域を場とする具体的な取り組みから重要な視座を得ることが期待されます。各支部の活動を共有させていただきながら、現場視点を重視した提言につなげられるよう努めたいと考えています。

一方、揺れ動く内外の政治・経済状況の下で国の政策も動いています。第7期科学技術・イノベーション基本計画の原案では、科学の再興や科学技術・イノベーション政策と安全保障政策の連携の強化などが打ち出され、科学技術を巡る政策のフレームワークも拡大しています。そこで、政策当局の課題や問題意識を伺うための勉強会も開始しました。

今は先行き不透明な時代と言われますが、EAJの提言を振り返ると、時代の変遷のなかで、科学技術と社会・経済的価値をつなぐ工学の役割の重要性や工学自体の進化、そして、会員の皆様の豊富な経験や識見を産学官のセクターを超えて集約できるEAJからの発信の意義を改めて認識します。EAJホームページの会員ページに専用コーナーがありますので、ご助言やご提案をお待ち申し上げます。



### 政策提言プロジェクト「海洋プラスチック研究」

海洋プラスチック研究プロジェクトリーダー 橋本 正洋 / MASAHIRO HASHIMOTO

地球規模かつ喫緊の課題である海洋プラスチックごみ問題については、もともと、海洋研究者等のアカデミアの指摘からはじまり、近年世界的に問題の大きさが認識されるようになり、政府、産業界の解決に

向けた取組が開始された経緯がある。一方、海洋プラスチックごみ問題については、その規模、内容及び地球環境と人類への影響について必ずしも科学的知見は十分でなく、また解決のためのイノベーションの方向性も明らかではないところがある。

日本の政府及び産業界は、海洋プラスチックごみを削減するための取組みを累次まとめており、ポイ捨て防止の徹底をはじめとする廃棄物の適正管理に加え、プラスチック製品の3R（Reduce：ごみを減らす、Reuse：繰り返し使う、Recycle：再生利用する）の行動の取組についてより一層の強化や、生分解性に優れたプラスチック、紙等の代替素材の開発と普及の促進など、喫緊の対応が必要としている。しかしながら、すでに海洋に蓄積されているごみ問題に関しての検討は大きくは進んでいない。

また、アカデミアからは、陸上で産出、使用されたプラスチックがどのように海洋に蓄積されてきたか、海洋中でどのように分解されているのか、マイクロプラスチックの賦存状況と産生の機序はどうなっているかなど、様々な課題があがっている。

本件は、上記に示すようにそもそもアカデミアとして取り組んできた経緯があり、今後イノベーションを創生して抜本的な解決策を提示することがアカデミアの責務であろう。特に日本工学アカデミーとしては、工学が20世紀の夢の新材料としてプラスチックを開発し、その利用を促進してきた背景を踏まえ、本問題に積極的に関与していくことが必要である。

このため、本問題に取り組む政府及び産業界と連携しつつ、工学アカデミーとしての立場を明らかにするとともに、問題解決に向けたイノベーション創生への提言をまとめていくこととし、2019年度に、日本工学アカデミーに産官学の有識者からなる「海洋プラスチック研究プロジェクト」を設置し、上記問題意識のもとに検討を開始した。

具体的には以下の内容の検討を進めてきた。

#### ①海洋プラスチック問題の工学アカデミーとしての観点から見た現状把握

- ・科学的知見の現状把握：具体的には、海洋プラスチックごみの現状(国内外)、特にマイクロプラスチック問題の現状把握、生分解プラスチック等の研究開発・普及状況等
- ・日本政府および国際的な検討状況と取組み
- ・産業界の取組み

#### ②海洋プラスチックへの課題の解決策の検討

- ・関係研究の動向とイノベーションの方向性

#### ③提言

- ・アカデミアとしての取組みの方向
- ・政府、自治体及び関係産業界への提案

検討は、研究プロジェクト開始直後のコロナ禍の進展により、大幅な遅延を余儀なくされてきたが、それでも第1回セミナー2020年10月7日（Zoom開催）、第2回セミナー2021年3月21日（Zoom開催）、第3回セミナー2021年6月21日（Zoom開催）、第4回（2023年6月5日）と研究を重ね、知見の蓄積を重ねてきた。

そして、第5回シンポジウム（2025年11月18日）では、プロジェクトのとりまとめに向けた主要論点について議論を行い、提言の取りまとめの議論を行った。

### 論点1：現在の世界の海洋プラスチック汚染の状況をどう見るか

海洋プラスチック汚染は、2050年までに海洋中のプラスチック累積量が魚類のバイオマスを上回るという試算に象徴される通り、地球規模の臨界点に近づきつつある。しかし、海洋科学の視点からは、流出推計量のうち海面付近で観測されるのはわずか1%にすぎず、残りの99%の行方が解明されていない「ミッ

シングプラスチック」の謎が最大の焦点である。

近年のJAMSTEC等の調査により、日本近海の黒潮続流域が世界的な「沈降のホットスポット」であり、地球表面積のわずか1.8%の海域に、全海洋の約3%に相当するプラスチックが沈降・蓄積している実態が明らかになった。また、プラスチックが深海堆積物に混入することで放射性炭素年代測定に最大約420年の誤差を生じさせる「プラスチック炭素」の問題や、有害添加剤（UV-328等）の長距離輸送など、汚染は単なるゴミ問題を越え、地球規模の物質循環を攪乱する因子として認識され始めている。

## 論点2：国際的対応はどのように進んでいるのか、あるいは停滞しているか

2022年の国連環境総会（UNEA）での決議を受け、プラスチック汚染に関する法的拘束力のある国際条約（INC）の策定交渉が加速している。この交渉は、プラスチックの「ライフサイクル全体」を対象とする点が画期的であるが、上流規制（生産規制）を求めるEU等の「野心的連合」と、廃棄物管理・リサイクルの強化を優先する産油国や生産国の間での対立が深く、議論は膠着状態に陥りつつある。

日本は、アジア太平洋地域の代表理事・副議長として、実効性のある共通ルールの策定と、各国の事情に配慮した柔軟な枠組みの「橋渡し」役を担っている。2040年までに追加的なプラスチック汚染をゼロにするというG7等の野心的な目標を掲げつつも、それを実現するための実効的な実施手段や資金メカニズムの構築が、今後の交渉の最大の山場となっている。

## 論点3：産業界はどう対応しているか

産業界では、1992年から続く「樹脂ペレット漏出防止」の取り組みに加え、CLOMA（クリーン・オーシャン・マテリアル・アライアンス）等を通じた官民連携が進みつつある。リサイクルにおいては、マテリアルリサイクル、ケミカルリサイクル、サーマルリサイクルの「3つの手法」の最適化が進められているが、特に国内のマテリアルリサイクル需要の拡大と、環境コストを適切に製品価格に反映（価格転嫁）できる社会的合意の欠如が大きなボトルネックとなっている。

代替素材に関しては、微生物由来のPHA（PHBH）など、深海の過酷な環境でも分解可能な高機能素材が社会実装され始めている。しかし、これらを生分解性が不十分な既存素材と混同することなく、漁具や農業資材といった「海洋流出リスクが高い用途」へ戦略的に配置していく設計思想が求められている。

## 論点4：政府の対応は進んでいるのか

日本政府は「プラスチック資源循環戦略」および「プラスチック資源循環促進法」の整備により、設計から排出・回収に至る包括的なライフサイクル対応の基盤を確立した。また、国際貢献として「MARINEイニシアティブ」を推進し、アジア諸国における廃棄物管理の人材育成やインフラ整備をリードしている。

一方で、未分別の一般廃棄物や産業廃棄物のより高度な循環、リサイクル素材の市場創出に向けた強力なインセンティブ、そしてモニタリングデータの国際標準化（ハーモナイズド・ガイドラインの整備）など、制度の実効性を一段高めるための継続的な政策支援が求められている。

## 論点5：アカデミアはどう対応していくべきか

プラスチックを開発・普及させてきた工学者・技術者の立場として、その「負の側面」に対してもイノベーションをもって責任を果たすことがアカデミアの使命である。アカデミアの役割は、単なる基礎研究にとどまらず、政策担当者・産業界・市民社会を科学的根拠（エビデンス）でつなぐ「知の架け橋」となることである。

具体的には、AIや高精度カメラを駆使した分析技術の高度化、制御可能な生分解性素材（スイッチ機能

等)の開発、そしてナノプラスチックを含めた多角的なリスク評価手法の確立を通じて、イノベーションによる抜本的な「出口戦略」を提示していく必要がある。

以上の議論を踏まえ、現在最終的な提言について検討を進めている段階にある。

提言案：日本工学アカデミーは、持続可能なプラスチック資源循環社会の実現に向け、工学界の責任と自負に基づき、以下の施策を提言する。

提言1：信頼しうる科学的知見のさらなる集積と知識の提供

提言2：海洋流出リスクに応じた「機能性代替材料」の開発と実装支援

提言3：資源循環の実効性を高める社会・経済システムの整備

提言4：科学コミュニケーションの強化と市民への正確な情報提供

提言5：アジア・知的ハブとしての国際連携と技術移転の主導

今後、本報告書の原案がとりまとめられ次第、EAJ内の手続を経て、各方面に配布していく予定である。本報告書を広くご活用いただくことを期待する。



第5回シンポジウム登壇者（右端が筆者）



## 政策提言プロジェクト 「社会、産業、人々の生活の変容を支える電力システムの在り方」

プロジェクトリーダー 萩本 和彦 / KAZUHIKO OGIMOTO

電力・エネルギーは、国民生活、産業活動、国家安全保障を支える最も基礎的な社会インフラである。しかし、その重要性にもかかわらず、安定供給が当然視されてきた結果、社会全体における認知や理解は必ずしも十分とは言えない。特に近年は、再生可能エネルギーの大量導入、デジタル化・電化の進展、地政学的リスクの高まりなどを背景に、電力・エネルギーシステムは構造的転換期にある。

こうした問題意識のもと、本プロジェクトでは2年間にわたり、(1) 2030年～2050年を視野に、技術的可能性とリスクを包含しつつ、社会実装の実効性を高めるための事例・ユースケースの収集・整理を通じた科学的根拠に基づき、我が国の社会・産業・生活の変容について検討を行うとともに、(2) 電力・エネルギーシステムのあるべき姿と、新たな電力システムへの段階的移行を実現するための視点および方法論を取りまとめ、様々なアクターの参考に資する政策的対応について提言を行うことを目的としている。これらの検討には、注目すべき移行の道筋、不確実性を織り込んだ検討手法、データ収集および解析・分析手法、人材育成などが含まれる。

なお本プロジェクトは、EAJの元東京電力副社長である種市健顧問より、レジリエントな電力システムネットワークに関する検討および政策提言の可能性について提起を受け、中村道治顧問が長年構想してきた内容を基盤として、2023年5月に企画素案を取りまとめ、発足に至ったものである。

本プロジェクトでは、若手世代を中心に、幅広い分野から厳選したテーマについて話題提供を行い、産学官に所属する多様な委員が文野を横断した「総合知」により議論を重ねる中で、視点や方法論の抽出・整理を行った。その成果を、経験豊富なメンバーによるレビューを経て提言書として取りまとめる方針とした(プロジェクト構成員:表1)。具体的には、キックオフ会議およびクロードワークショップにおいてプロジェクトの進め方を議論した後、電力システム移行期における「キー技術・キーシステム技術」や「人材の獲得と育成」などをテーマに、毎回2名の発表者による話題提供を基に約30名の委員が議論する会合(各2時間)を計10回開催するとともに、2025年4月にESI等との共催による中間シンポジウムも開催した(写真1(a)(b))。

提言取りまとめに向けた第10回会合では、電力システム変革は専門家の合意形成のみでは完結せず、価値判断を伴う政治的意思決定を不可避的に含むとの認識が共有された。これまでの議論を踏まえ、将来



写真1(a) パネル討論1：キー技術とキーシステム技術



写真1(b) パネル討論2：人材の獲得と育成

表1 プロジェクト構成員

(リーダー)

お名前	ご所属
萩本 和彦	東京大学生産技術研究所 特任教授

(顧問)

お名前	ご所属
蘆立 修一	公益財団法人東電記念財団 常務理事
横山 明彦	東京大学 名誉教授

(討議・執筆委員) 将来を担う、より若い世代の方々

お名前	ご所属
飯岡 大輔	中部大学 大学院工学研究科 教授
石井 英雄	早稲田大学 スマート社会技術融合研究機構 上級研究員 (研究院教授)
岩船由美子	東京大学生産技術研究所 教授
江村 克己	福島国際研究教育機構 (F-REI) 理事
大関 崇	産業技術総合研究所 太陽光システムチーム 研究チーム長
河辺 賢一	東京科学大学 電気電子系 電力・エネルギーグループ 准教授
小宮山涼一	東京大学 大学院工学系研究科 教授
紺谷 怜央	株式会社日立パワーソリューションズ 技師
杉山 昌広	東京大学 未来ビジョン研究センター 教授
辻 隆男	横浜国立大学 大学院工学研究院 教授
中島 達人	東京都市大学 理工学部 教授
馬場 旬平	東京大学 大学院新領域創成科学研究科 教授
原 亮一	北海道大学 情報科学研究院 准教授
山口 順之	東京理科大学 工学部 電気工学科 教授
山口 容平	大阪大学 大学院工学研究科 准教授
山本 敏之	関西電力送配電株式会社 企画部長
芳澤 信哉	大阪大学 大学院工学研究科 環境エネルギー工学専攻 准教授
渡邊裕美子	株式会社Loop 戦略本部GX推進部 部長

(閲読委員) より経験の豊富なメンバー

お名前	ご所属
浅野 浩志	岐阜大学地方創生エネルギーシステム研究センター 特任教授 / 東京科学大学総合研究院ゼロカーボンエネルギー研究所 特任教授
五十嵐仁一	ENEOS総研株式会社 顧問
石亀 篤司	大阪公立大学 大学院工学研究科 教授
伊藤 一秀	九州大学 総合理工学研究院 教授
井上 俊雄	富山大学 工学部 北陸電力共研講座 客員教授
岡本 浩	東京電力パワーグリッド株式会社 取締役副社長
加藤 丈佳	名古屋大学 未来材料・システム研究所 教授
北 裕幸	北海道大学 情報科学研究院 教授
下田 吉之	大阪大学 大学院工学研究科 教授
杉山 正和	東京大学 先端科学技術研究センター 所長
辻 健	東京大学 大学院工学系研究科 教授
戸田 直樹	東京電力ホールディングス株式会社 経営技術戦略研究所 経営戦略調査室チーフエコノミスト
中澤 治久	火力原子力発電技術協会 エンジニアリングアドバイザー
奈良 宏一	茨城大学 名誉教授、福島工業高等専門学校 名誉教授 (元校長)
林 泰弘	早稲田大学 理工学術院 教授
藤井 康正	東京大学 工学系研究科 教授
北條 昌秀	徳島大学 大学院社会産業理工学研究部 教授
本庄 暢之	株式会社ジェイウインドサービス 代表取締役社長
矢部 彰	新エネルギー・産業技術総合開発機構 TSCフェロー
山口 博	元東京電力ホールディングス株式会社 代表執行役副社長技監
餘利野直人	呉工業高等専門学校 校長 / 広島大学 名誉教授・特任教授

の電力・エネルギーシステムの在り方を見据え、①変革を駆動する要因 (ドライバー)、②電力を超えた統合 (インテグリティ)、③意思決定とリーダーシップ、④データ活用の4つの視点から俯瞰的な整理が行われた。

ドライバーとしては、再生可能エネルギーおよび分散型資源の拡大、需要の能動化、データセンター等の大規模需要の増加、人口減少および設備の高経年化、地政学・経済安全保障、AI・ロボティクスの進展、インバタ機器の大量導入に伴う系統安定性への影響などが挙げられた。これらはリスクであると同時に、

制度および技術を刷新する好機でもあるとの認識が共有された。

インテグリティの観点では、電力単独ではなく、モビリティ、産業、IT、水素等を含むエネルギー全体の最適化が不可欠であり、価格、供給力（アデカシー）、レジリエンス、経済安全保障といった指標を共通基盤として整理すべきとの意見が示された。また、市場設計や地点別価格の是非、供給責任の在り方についても議論が行われた。

さらに、発送分離後の分断された意思決定構造の下では将来像を描きにくいとの問題意識が共有され、政治・行政・事業者・研究者が関与するトップダウン型の議論の場の必要性が指摘された。加えて、PMUやスマートメータ等のデータ共有と解析基盤の整備を通じ、エビデンスや定量的結果に基づく政策形成（EIPM）を推進する重要性が確認された。

技術的最適解が存在しても、社会的・政治的には選択の問題である。本プロジェクトは、答えを一つに収束させることを目的とするものではなく、判断に必要な論点と選択肢を可視化し、議論を継続するための共通基盤を提示することに意義があると考えている。

現在、最終段階として政策提言の取りまとめを進めており、工学を中心に様々な分野・セクターの会員および有識者の知見を統合するため、本年4月23日（木）13:20～17:30に後半シンポジウムを開催する予定で（申込URL：[https://u-tokyo-ac-jp.zoom.us/meeting/register/bqRh\\_Zy1S4q-LpcVqQ3a7w](https://u-tokyo-ac-jp.zoom.us/meeting/register/bqRh_Zy1S4q-LpcVqQ3a7w)）、提言報告書の公表に向け、準備を進めているところである。本年夏を目標としている本提言報告書およびその報告会が、電力・エネルギーを巡る将来像について、政策決定の場と社会との間における持続的な対話を促進する一助となることを期待する。



## 政策提言プロジェクト 「人類の安寧とより良き生存」を目指した工学倫理と工学教育」

「人類の安寧とより良き生存」を目指した工学倫理と工学教育

プロジェクトリーダー 小泉 英明 / HIDEAKI KOIZUMI

副プロジェクトリーダー 長井 寿 / KOTOBU NAGAI

幹事 大橋 俊朗 / TOSHIRO OHASHI

沖田 京子 / KYOKO OKITA

田口 康 / YASUSHI TAGUCHI

武見 綾子 / AYAKO TAKEMI

星野 歩子 / AYUKO HOSHINO

松永 行子 / YUKIKO MATSUNAGA

今、世界はグローバルな課題として環境・エネルギー問題、超高齢化社会問題、国際紛争問題などに直面している。18世紀後半の産業革命以降、化石燃料の使用の増加に伴い1970年代から地球環境は急激に悪化し、また2022年に始まったロシアによるウクライナ侵攻や2023年に始まったイスラエルによるガザ侵攻など世界情勢は極めて混沌とし大きく変容・変質してきている。安寧で持続的な未来社会を構築し次の世代に引き継ぐためには、人類が蓄積してきた多様な個別専門知を総合知として結集し、さらに集団知（国民全体の知）へと展開して喫緊のグローバルな課題に果敢に取り組み解決することが重要である。「人類の安寧とより良き生存」の実現にとって、科学・技術とイノベーションの重要性が益々増してきているが、工学が作り出す人工物は人間社会にとって恩恵（光）と課題（影）をもたらす上、科学・技術とイノベーションの高度化と強大化が一層進む現在において、グローバルな課題や懸念に対峙し解決するためには新たな「工学倫理」が今こそ必要である。さらに、人間は自然の一部であり、地球生物圏において人間を含

めた自然の生態系が絶妙なバランスを保ちながらかつ限界を有して共存しているという事実を深く感じ理解することも重要である。

本プロジェクトではこれまでに、一般財団法人新技術振興渡辺記念会令和6年度科学技術調査研究助成（上期）（令和6年4月1日～令和7年6月30日）および公益社団法人生存科学研究所令和6年度（令和6年4月1日～令和7年3月31日）・7年度（令和7年4月1日～令和8年3月30日）自主研究の助成を受けて、未来志向の新しい工学倫理の基盤を構築することを目指し、以下のシンポジウム開催により議論を重ねてきた。第1回「工学倫理における現場での課題」、第2回「生成AIと倫理」、第3回「ことばと倫理」、第4回「戦争における倫理と法」、第5回「医療と倫理」を開催し、私達が具備すべき「倫理」について議論を深め、「人類の安寧とより良き生存」の実現のためには、元来、人間の脳に具備されている「共感」が極めて重要であることを明らかにしてきた。共感とは、人間と人間の関係性のみではなく、人間と社会、人間と自然の関係性における道徳哲学であり「温かい心」である。さらに、最新の脳科学研究によれば、倫理観や共感性は乳幼児期から芽生え始め、0～1歳の時期に他者への共感や正義感の基礎が形成されることが明らかにされており、幼児期から初等・中等・高等教育まで接続する長期的・発達の視点を取り入れた工学倫理とその教育の構築基盤が確かにあることを確信させた。そこで、「人類の安寧とより良き生存」の真の実現のためには、社会実装の手段となる工学教育に軸足を移すことが必要であるとの認識に至り、第6回「工学教育の原点」を開催した。ここまでの成果は、EAJ報告書2024-01「「来たるべき未来の工学倫理と工学教育に関する調査研究」成果報告書」として取りまとめ、冊子媒体およびプロジェクトHP上で公開している。

科学技術の進歩は社会のスピードをはるかに超えており、広義の倫理そのものが、工学を基調とする最先端の科学技術を抜きにしては語れない時代に入りつつある。科学技術の高度化・強化が人類の安寧や世界の平和、持続可能な発展を脅かす可能性すらある。問題の本質は、従来の工学倫理とその教育では科学・技術とイノベーションの急激な進歩とその利活用の在り方に対応できていない点にもある。すなわち、これまでの工学倫理の教育は大学をはじめとする高等教育機関および研究機関において実施され、研究を職業とする者（研究者、技術者）を対象としている。近年、その対象として学部学生や中高校生にも対象を拡大し、「科学技術が社会におよぼす影響や技術者が社会に負っている責任」について問い、自覚的理解のための自己研鑽を勧めてきている。しかしながら、科学技術は社会の隅々まで遍く普及しその受益者は広く非技術者に及んでいるので、工学倫理は専門分野や世代を限らずより広く共有されるべきである。現在、新技術振興渡辺記念会令和7年度科学技術調査研究助成（下期）（令和7年10月1日～令和8年9月30日）の助成を受けて、発達科学・神経科学の知見も取り入れたより長期的・発達の視点で工学倫理教育を深耕している。「技術者」のみならず「非技術者」および「次世代」とも「共感」できる、そして「地球」とも「共感」できる新しい倫理へと紡ぎ直し、早期社会実装に向けた緊急提言を取りまとめることを目的としてプロジェクトを推進している。具体的には、「地球」と「次世代」を当事者とする工学倫理教育の方法論の構築に関して、専門家ならびに非専門家を含めたフォーラムの開催、および共同研究者による意見交換等を通して、新しい工学倫理とその教育実践方法論の構築を図る。さらに、EAJによる立法府と科学者の意見交換による政策共創「政治家と科学者の対話の会」などの活動や、国際工学アカデミーによる工学教育に関する活動などを通して、技術者のみならず非技術者を含めたステークホルダーに発信し早期社会実装へと繋げながら、2026年度を目処に未来志向の工学倫理と工学教育に関する政策提言書をまとめる予定である。



第6回シンポジウム(2025年5月27日(火))  
第二部 TDトークの様子

日時：2025年11月28日（金）15:00～17:00 Zoomによるオンライン開催

出席者：

[副会長等] 五十嵐仁一副会長、大島まり副会長、城石芳博専務理事、坪井裕常務理事、林秀樹常務理事  
[支部長等] 北海道支部・瀬戸口剛支部長、同・川村みどり専務理事、東北支部・長坂徹也支部長、中部支部・林良嗣支部長、関西支部・田中敏宏支部長、九州支部・山田淳支部長

[支部担当理事等] 瀬戸口剛北海道支部担当理事（支部長）、長坂徹也東北支部担当理事（支部長）、久枝良雄九州支部担当理事、小林信一中国・四国支部設立担当理事、塩満典子中国・四国支部設立担当理事

[委員長等] 政策提言委員会・倉持隆雄委員長、政策共創推進委員会・（代理）坪井裕委員、科学技術・イノベーション2050委員会・（代理）有川太郎副委員長、若手委員会・関谷毅委員長、ジェンダー委員会・行木陽子委員長、会員強化委員会・石原直委員長

2025年11月28日（金）に第8回支部長会議が開催された。これまでの7回の支部長会議では、各地域の特質に根差した活動の活性化を図ってきており、今回もEAJ本部、支部及び委員会の活動などの更なる発展に繋げるため、意見交換を行った。会議では、EAJ経営状況、各支部・各委員会の活動・取組状況や課題などの情報共有を行うとともに、工学による社会課題の解決、経営基盤の強化・事業活性化に向け、文理・分野・産学官融合組織としてのEAJの特質を生かした、質が高く持続可能な事業活動・事業共同企画・社会実装のあり方、提言実効性の向上策などについて意見交換が行われた。

会議は林秀樹常務理事の司会で開始され、急用のためご欠席となった安西祐一郎会長に代わり、最初に五十嵐仁一副会長より、多くの支部長・委員長等にご参加いただいたことへの御礼、支部の歴史、中国・四国支部設立に向けた状況説明があり、さらに、2025年は日本社会において制度・慣行・意識の転換が進んだ節目の年となったことも踏まえ、EAJでなければ成し得ない独自の事業活動と政策提言を積極的に展開し、基本理念のさらなる具現化を目指し一緒に活動すべく、情報共有、課題解決に向けた活発な意見交換をお願いしたい、との開会挨拶があった。

続いて、城石芳博専務理事から、EAJ活動概要と賛助会員の減少などによる経営課題の説明があり、さらに各支部から、支部活動の状況、新たな取り組み、EAJ本部・委員会との連携・共同主催に関する企画案、要望などについて説明があった。主な要望は、賛助会員企業への入会のメリットの明確化と方策、オンラ



オンライン支部長会議の参加者

イン講演会開催マニュアル等の共有化と中国・四国地区会員への適切な情報提供の方策、理事会等での報告日程の事前提供などが行われており、これらの要望に対しての回答が説明され、必要な情報を適時的確に共有させていただき連携を深めることとした。

さらに城石芳博専務理事より、2026年度の事業・予算方針(案)、会員推薦・入会ご案内、経営課題について、検討中の改善策と討議希望事項などの説明あり、活発な意見交換が行われた。意見交換では、委員会から、委員会・支部活動の連携状況、要望や提案などに係る説明があり、続いて、委員会への支部からの参画促進策、予算の支部への配分方法、地域の国会議員との連携強化策、さらには、若手会員の会費負担の軽減や、非会員でも委員会活動に参加できる仕組みを活用し、EAJの活動を理解していただくことにより若手会員の増強につなげることなど活発な議論が行われた。また、台湾科学技術協会の国際交流プログラムなどについての情報共有もあった。本部としても更なる活性化に向け、ご協力、ご支援をさせていただきたいとの説明があった。

最後に、五十嵐仁一副会長より、多くの支部長、委員長等の幹部にご参加いただいたこと、および、非常に重要なご意見を多数賜ったことへの感謝の意と、経営課題改善に向けた会員の満足度向上やエンゲージメント強化の必要性が述べられ、支部長に対しては、各地域の産業界で活動に興味がありそうな方の発掘をお願いしたいが、そのために必要な情報は本部から提供するなど連携して進めていきたいとの閉会挨拶があり、活発で実り多い多数の議論のあった第8回支部長会議を終了した。示唆に富む議論が多かった今回の意見交換などを契機として、今後一層の活動活性化につながることを期待される。



## 九州支部講演会「工学の躍進－生物のしくみをエンジニアリング」 開催報告

九州支部 支部長 山田 淳 / SUNAO YAMADA

2025年11月21日(金)、福岡市産学連携交流センター(福岡市西区九大新町)の交流ホールにて、EAJ九州支部講演会「工学の躍進－生物のしくみをエンジニアリング」を開催した。まず、山田 淳 九州支部長よりEAJの紹介と本講演会主旨についての開会の挨拶があった。

最初に、徳留 弘優 氏(TOTO株式会社 総合研究所 先端マテリアル研究部 上席研究員・同志社大学 非常勤講師)より「光合成を模倣した光触媒膜によるソーラー水素製造」という演題で講演があった。グリーンエネルギーとして期待される水素は、現状では化石燃料を原料とする製造法が主体であるため、水を原料としたクリーン製造法への転換が急務であり、太陽光を用いた水の分解による水素製造法が注目されているという研究開発の背景について説明があった。具体的取り組みとして、植物が営む光合成反応で駆動しているZスキーム型光－化学エネルギー変換の原理を模倣した光触媒反応膜の開発と、可視光を利用した水素製造の成功例について紹介された。さらに、水素発生効率の向上を目指した材料探索や、水素製造装置としての最適化条件の設定等、社会実装に向けた取り組みについても紹介があった。最後に、今後の展望等について触れられ、本講演は終了した。



徳留 弘優 氏



星野 友 氏

次に、星野 友 氏（九州大学大学院工学研究院 教授・株式会社JCCL 取締役CTO）より「生物のように効率よくCO2を分離するシステムの実現を目指して」という演題で講演があった。はじめに、カーボンニュートラル社会の実現のために、大気中に放出される二酸化炭素を回収し有効利用する技術開発の重要性が益々高まっていることについての説明があった。具体的な取り組みとして、生き物が効率よく二酸化炭素を体外に排出する機構を化学的な観点から説明され、二酸化炭素を吸着・放出するゲル粒子の開発と、エネルギーをほとんど使用せずに二酸化炭素を分離回収するシステムへと展開してゆくプロセスについて説明された。さらに、社会実装に向けた一連の開発状況について、九州大学発のスタートアップ企業である株式会社JCCLにおいて開発中の二酸化炭素分離技術や商用装置の紹介も含めて設けがあり、本講演は終了した。

最後に、日野 伸一 九州支部副支部長より全体を総括する閉会挨拶があり、盛況のうちに終了した。



## 九州支部 高専出張講演会（第9回）開催報告

九州支部 支部長 山田 淳 / SUNAO YAMADA

2026年1月21日（水）、都城工業高等専門学校（宮崎県都城市）の多目的ホールにて、EAJ九州支部 高専出張講演会（第9回）を開催した。まず、都城工業高等専門学校 田村隆弘 校長より開会挨拶があり、引き続き山田 淳 九州支部長よりEAJの紹介と本講演会主旨についての挨拶があった。

今回は、宮崎大学教育学部理科教育講座・講師の中村 大輝 氏により「生成AIで変わる未来の働き方」という演題で、本科1年生（全学科）を対象に講演があった。

生成AIの仕組みと活用方法に関する講義を通して、AIを「賢い相棒」として使いこなし、AIに「仕事を奪われる」のではなく、AIとともに新しい仕事や価値を「創り出す」ための視点を探りつつ、未来の働き方について考えてゆこう、という内容である。

はじめに、Society 5.0の社会について説明があり、超スマート社会における生成AIの必要性についての説明があった。次いで生成AIのリスク、新しい時代におけるAIとの付き合い方、生成AIの使いこなし方、プロンプトの工夫、AI時代の働き方という流れで講演が進められた。起筆すべきは、会場の学生にはスマホを持参してもらい、アンケートを取りながらの講演が進められたことである。例えば、生成AIを使ったことがあるか？の問いには153名中98.7%がyesという回答であり、Z世代学生へのAIの浸透具合の高さに驚嘆した。さらに生成AIのしくみや作り方についての話のあと、専門性（機械学科）の内容や問いかけに対する回答の速さについて、生成AIと学生との勝負が行われ、会場全体が大いに盛り上がり



講演風景

た。参加した殆どの学生は生成AIを肯定的に捉えているようであり、生成AIを正しく使うために注意すべき点や使いこなし方などについて、食い入る様に説明を聞いていた。自身の強みとAIの強みを賢く活用してゆくことがエンジニアとして重要であることを語り掛けられながら講演が終了した。

最後に、高松 洋 九州支部副支部長より全体を総括する閉会挨拶があり、盛況のうちに終了した。終了後、学校内の施設紹介があり、学生が楽しく活動している様子も見学することができた。



## 第1回日独先端工学 (JAGFOE) シンポジウム報告

日独先端工学プログラム (JAGFOE) 実行委員会委員長 原山 優子 / YUKO HARAYAMA  
JAGFOE 運営委員長 成田 明光 / AKIMITSU NARITA

2025年11月25日から28日にかけてKKRホテル東京、DMG森精機株式会社東京グローバルソリューションセンター、およびCenter of Garageを会場として第1回日独先端工学 (JAGFOE) シンポジウムを開催しました。

会議前夜となる25日にはウェルカムレセプションでは、日本フンボルト協会 縣公一郎理事長と原山優子 JAGFOE 実行委員長・EAJ 国際委員長が挨拶を行い、また参加者間の親睦を深めました。

シンポジウムは安西祐一郎会長による開会の辞と Inka Löck フンボルト財団ベルリン事務所長の挨拶で始まり、日独運営委員長による趣旨説明に続いて、“Multifunctional Materials” (多機能性材料) と “Sustainable Engineering Systems” (持続可能な工学システム) の2トピックについて、講演、議論が行われました。

26日にそれぞれのトピックの前半部、27日に後半部の講演を行うことで、トピックの枠を越えた議論の促進を図り、90分の枠を4つ設ける形として、4名の日独運営委員がそれぞれ1枠ずつチェアを担当しました。まずはチェアが自身の研究内容を含めて10分程度のイントロダクションを行い、その後2-3名の講演者が15分程度の発表と簡潔な質疑応答、最後にパネルディスカッション形式で講演者全員を交えた議論を行う形式としました。どの枠においても質問が途切れず、終了時間まで非常に盛んな議論が続き、26日の午後にはポスターセッションを開催し、それぞれの参加者が相手国からの参加者全員と議論する形式にすることで、参加者間の交流を促進しました。26日のオフィシャルディナーでは、小平



左から成田明光運営委員長、原山優子 JAGFOE 実行委員長、Sarah Fischer 運営委員長 (ウェルカムレセプションにて)



安西祐一郎会長による開会の辞



シンポジウムの様子



ポスターセッション



日本文化紹介



小平桂一氏によるディナースピーチ

桂一氏（元日本学術振興会ボン研究連絡センター長・元国立天文台台長）をお迎えし、すばる望遠鏡の建設から地球規模の人口変動に至るディナートークを行っていただき、永野博JAGFOE実行委員会アドバイザー・EAJ顧問が日本語と堪能なドイツ語の2ヶ国語による挨拶を行いました。

27日には日独の研究助成機関・財団の代表者による助成プログラムの紹介に続き、代表者全員を交えたパネルディスカッションを行い、参加者全員が自由に議論できる時間も設けました。その後、スポンサー企業でもあるDMG森精機株式会社東京グローバルソリューションセンターを訪問し、藤嶋副社長から同社の事業や製品、またドイツの技術者らとの交流等に関してご紹介いただきました。

最終日はCenter of Garageを会場として、今後重要となる研究課題に関するブレインストーミングを行いました。その後Center of Garageのスタートアップ2社の代表によるプレゼンテーション、続いてスポンサー企業4社の代表に事業や研究内容についてご紹介いただき、最後にスポンサー企業からの代表者全員をパネリストとしたパネルディスカッションを行いました。原山優子JAGFOE実行委員長・EAJ国際委員長の挨拶をもって第一回JAGFOEは閉会し、午後は希望者がCenter of Garageを見学しました。



DMG 森精機東京グローバルソリューションセンター見学

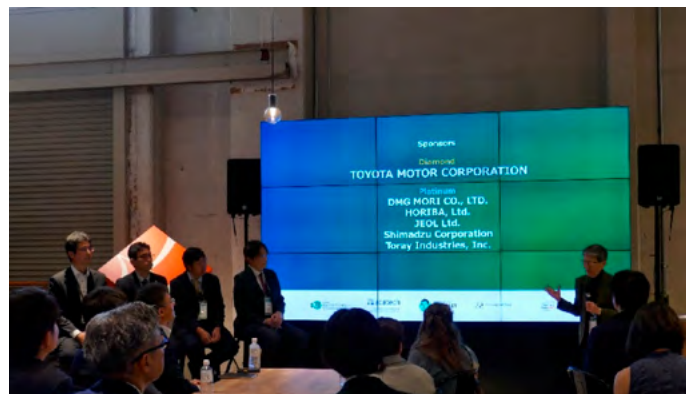


Center of Garage でのブレインストーミングセッションなど

今回初開催となるJAGFOEを、日独の研究者間の密な討議と交流を可能とする実りある会議として実現できたことは、日独運営委員会のSarah Fischer運営委員長（フラウンホーファー非破壊試験研究所）、関口悠運営委員（東京科学大学）、Viacheslav Slesarenko運営委員（フライブルク大学）、参加された皆様、共催機関であるドイツ工学アカデミー（acatech）、フンボルト財団（AvH）、フォルクスワーゲン財団、ドイツ科学・イノベーションフォーラム東京（DWIH Tokyo）、ならびにスポンサーとしてご支援いただいたトヨタ自動車株式会社、DMG森精機株式会社、株式会社島津製作所、株式会社堀場製作所、日本電子株式会社、東レ株式会社、会場をご提供いただいた株式会社グローカリンク、日本側の事前勉強会会場をご提供いただいた科学技術振興機構（JST）、科学技術国際交流援助助成をご提供いただいた一般社団法人新技術振興渡辺記念会、研究者情報提供にご協力いただいたドイツ研究者ネットワークの皆様のおかげです。今後、JAGFOEの継続的な会議としての発展と、今回の参加者間のさらなる交流や共同研究への発展に期待します。

次回のJAGFOEは2027年にドイツで開催を予定しております。日独の科学技術交流のさらなる深化に向け、スポンサーとしてこの取り組みをご支援いただける企業・機関からのご連絡を心よりお待ちしております。

▼JAGFOEプログラムサイトはこちら <https://eaj.jp/org/jagfoe/>



スポンサー企業によるパネルディスカッション

コメント ※氏名50音順

北畑 繁／三菱電機株式会社

参加している方々の洗練された研究内容に加え、プレゼンテーション能力の高さに感銘を受けました。国内外の学术界、産業界を担う人材とインタラクティブな時間を過ごすことができ、今後のキャリアを深く考えるうえで大変有意義なシンポジウムでした。

#### 小島 朋久／埼玉大学

JAGFOEに参加したことで、これまで交流のなかった第一線で活躍する若手研究者や企業の方々と知り合うことができ、大変刺激を受けるとともに、視野を広げることができました。また、自分の研究を俯瞰的に見つめ直す良い機会となり、今後の方向性を考える上でも非常に有益でした。

#### 関口 悠／東京科学大学

今回初開催となるJAGFOEに運営として携わらせていただきましたが、若い研究者同士の議論に活力をもらうとともに、考え方だけでなく研究へのアプローチやホットな研究テーマなど、さまざまな観点から国による違いを肌で感じることができ、今後の研究への取り組み方や国際交流の在り方について多くのことを学べた数日間となりました。

#### 高橋 明／東京科学大学

自身の専門外の研究に多く触れる貴重な機会となり、多くの刺激とアイデアをいただきました。またこのような国際的な場に久しく出ていなかったため、大変有意義な時間を過ごせました。

#### 高谷 智哉／トヨタ自動車株式会社

日独の異分野研究者と直接議論できたことは大きな刺激となりました。アカデミアに加え企業研究者とも交流が生まれ、相互理解を促すオープンなフォーラムを通じて、国境・分野を越えた共同研究や連携の可能性を実感しました。

#### 氷見山 幹基／産業技術総合研究所

バイオ由来材料の開発者としてjagfoeシンポジウムに参加させていただきました。マテリアル、工学分野の先端的な研究に触れ、多くの刺激をもらいました。異分野になると英語でのディスカッション自体が難しいこともあったのですが、それも含めて良い経験でした。参加者の属性が、大学、公的機関、企業と全く異なる立場だったことで交流が非常に面白く、今回のネットワークをぜひ今後の研究に活かしていきたいと考えています。

#### 丸嶋 利嗣／株式会社掘場製作所

普段関わることのない分野の研究者の方々と、十分な時間をとって議論でき非常に有意義でした。異分野だからこそ多様な視点で互いのテーマを捉え直せ、新たな気づきが得られました。企業研究者の参加も多く、応用的な議論も多かった点も印象的でした。今後も関係を継続したいです。

#### 山田 大介／株式会社豊田中央研究所

日独の研究者の方々と集中的に研究討議する機会を得て、大変有意義でした。新たに知り合えた方々と連絡を取り合える関係になれたことも、とてもありがたく感じています。この機会を活かし、より魅力ある研究を展開していきたいと存じます。

#### 渡邊 千穂／広島大学

異なる文化やキャリアの研究者と分野を越えて話す中で、多くの気づきを得ました。立場や専門の違いにかかわらず丁寧に向き合ってくださいる方々との対話は安心感があり、その中で課題が明確になった場面もありました。合宿形式だからこそその解像度で交流できたことも今後につながる財産と感じています。このような場を設け、プレミーティングを含め円滑な運営をしてくださった皆様に心より感謝申し上げます。

第28回東アジア三か国工学アカデミーシンポジウム／円卓会議 (EA-RTM) は12月5日 (金) にEAJ主催、岡山大学共催により開催された。テーマは“Pursuit of Well-Being in an Aging Society (高齢化社会における幸福の追求)”であり、東アジアの3か国が共通して直面する課題について議論する場となった。

当初対面での開催も検討したが、中韓のアカデミーとの協議を経て、ハイブリッド形式での開催となった。

## オープニング

シンポジウムにおいては、3アカデミーの代表による開会挨拶があり、主催のEAJからは安西会長のビデオメッセージが寄せられた。続いて、NAEKのEuijoon Yoon会長、CAEのDing Ning副会長の挨拶がオンラインで行われた。

技術セッションの開始にあたっては、EAJを代表して原山フェローがシンポジウムの主旨説明を行った。東アジアの3か国がいずれも高齢化社会に進展という喫緊の課題に直面していること、その対応策としてAI、DX、ロボット技術などの科学技術を導入が重要となる、技術の高度化に伴う倫理的問題を避けて通れないことなどがテーマ選定の理由であることを述べた。

続いて岡山大学の奈須学長より、Keynote Speechが行われた。東アジア3か国の工学における技術協力の必要性が以前にも増して重要となっていること、また、今回のテーマである“高齢化社会における幸福の追求”の問題が、3か国の重要な課題であるとの共通認識のもとに技術開発、技術協力を進めて行くべきであると述べた。

## 個別セッション

第一セッション“Ethical and legal issues for social implementation of STI”においては、三島実行委員長が司会を務め、日本からは広島大学の野口怜准教授が“Beyond Data Sharing : Ethical and Regulatory Challenges in the Use of Clinical and Synthetic Medical Data”という題目で講演を行った。単なるデータ共有を超えて、臨床データなどを高度に活用して行く際の倫理的な問題を議論する展開する内容であった。韓国からはVUNOのCSOであるDr. Taek Soo Kimが“From Innovation to Impact : How Industry Can Build Trustworthy Medical AI”という題目で、中国からは北京大学国際がん研究所のQimin Zhan教授が“Ethics and Governance of Scientific & Technological Innovation”として講演を行った。

第二セッション“Promotion of social participation of the elderly and their families and reduction of social burdens”においては、原山フェローが司会となり、中国から北京大学人口問題研究所のGong Chen教授が“AI for Community : Intergenerational Collaboration and Governance in Aging Communities”として、日本からは山口大学の林裕子教授が“Promotion of Social Participation of the Elderly and Their Families and Reduction of Social Burden : Potential for Supporting the Elderly using the Metaverse and Avatars”として高齢者福祉の分野はメタバースなどのDXの適用分野として適していることを示した。韓国からは、DxP Biz. Division of Samsung C&T 機構長であるHye Jung Cho博士が“Digital Companions in the Aging Era (AI Care for a Connected Generation)”として講演を行った。

ここで、昼食休憩に入り、日本側参加者は学内のJテラスカフェでの昼食となった。

再開後の第三セッションでは、司会を林理事に交代し、“Challenges of human-centered medical and nursing care in an aging society and solutions through innovation”をテーマに3件の講演が行われた。先

ず浦項工科大学のChulhong Kim教授が“Wearable Biomedical Integrated Circuits for Aging Population”とする講演を行った。次にRuijin病院の院長でもある上海交通大学のNing Guang教授より“Advanced Medical Technologies for Aging Society”と題する講演が行われた。最後に、岡山大学の中澤篤志教授より“Computational tender-care science : Computational and cognitive neuroscientific approaches for understanding the tender care”として、認知症ケアにおいて視線の合わせ方、対象者との距離の取り方などが重要な要素であることを実証的に解明する内容の発表が行われた。

### セッション全体を通じた所感

以上のように、高齢化社会における諸問題は、東アジアの3か国において、世界的に見ても特に深刻であることから、危機意識は共有出来ており、各国の講演者間の議論が活発に行われたことが印象的であった。その問題に取り組んでいる専門家こそ問題解決の難しさを知る、といったところだろうか。各セッションを通じて、技術的な解決策だけでなく、倫理的・社会的な側面からの多角的な議論が展開され、有意義な知見の共有が行われた。

### 円卓会議

続いての円卓会議の部では、まず各アカデミーから1年間のアップデートを中心に活動報告が行われ、EAJからは森本国際副委員長が説明を行った。

その後、今回の技術協力に関するアンケートの内容と結果説明をEAJから三島実行委員長が行った。続いて、NAEKのJae-Woo Park国際委員長から、次回2026年のEA-RTMの開催はNAEKがホストアカデミーとなり“Shaping Future Industrial Systems through Physical AI and Green Innovation”をテーマとしての開催が提案された。韓国側は、6または7月に済州島における対面開催を希望しており、EAJとしても渡航人数を絞って対面開催に対応する方向で回答した経緯がある。

### 閉会

第28回EA-RTMの最後に、ホストアカデミーであるEAJを代表して、原山フェローによるClosing Remarkが行われた。高齢化社会の諸問題や、問題解決のために先端技術を適用する際の倫理問題などがいかに重要かつ喫緊の課題であるか、どのような取り組みが進行中であるか再認識する場となったことを述べるとともに、ともに問題に取り組むNAEK、CAEの両アカデミーと場所や機材の提供、運営の一切をとりしきってくれた岡山大学の技術職員の皆さんに深く感謝して閉会した。

### おわりに

以上のように2025年の第28回EA-RTMおよび併催のシンポジウムは順調に開催され、高齢化社会に直面しているという共通認識のもと、真剣かつ有意義な議論が行われた。2026年の韓国開催は時期的にも通例と異なり早い時期での開催、また3年ぶりの対面会議が予定されており、前倒しで準備を進めて行く必要があるだろう。

本シンポジウムの成功は、岡山大学の全面的な協力、NAEK・CAEとの緊密な連携、そして多くの関係者の尽力によるものである。ここに改めて深く感謝の意を表する。



登壇者および岡山大学の皆さまとの記念写真

## 日米先端工学 (JAFOE) シンポジウム事後報告会のご報告

日米先端工学シンポジウム (JAFOE) 実行委員会 委員長 金谷 一郎 / *ICHIROH KANAYA*  
 JAFOE 2025 運営委員長 所 千晴 / *CHIHARU TOKORO*

2025年6月に米国カリフォルニア大学サンディエゴ校にて開催された日米先端工学シンポジウムにおける最先端の研究成果および討議内容について、お茶の水東京ガーデンパレスにて事後報告会をハイブリッド形式で開催し、日本工学アカデミー会員の皆様にご紹介いたしました。

当日は、原山優子国際委員長による開会挨拶に始まり、運営委員長である所による総括が行われました。続いて、JAFOE参加者の互選による Best Speaker Award 受賞者である小平 翼氏 (東京大学大学院新領域創成科学研究科) へ、菱田公一氏 (日本工学アカデミー顧問) より表彰状が授与されました。また、井上 史大氏 (横浜国立大学)、杉原 加織氏 (東京大学生産技術研究所) の2名も同賞を受賞され、Most Interactive Presenter's Award には、野崎 達生氏 (早稲田大学理工学術院創造理工学部) が選出され、午後のEAJ賀詞交歓会にて表彰が行われました。

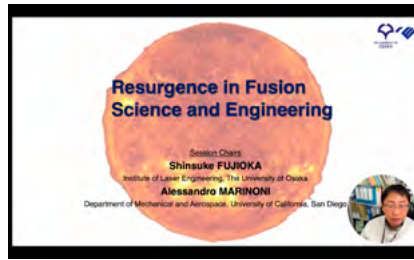
続いて各セッションからの報告として、藤岡慎介委員 (大阪大学) よりビデオメッセージが寄せられ、長谷川洋介委員 (東京大学) はオンラインにて登壇されました。会場では、百瀬 健委員 (熊本大学)、三



原山国際委員長 挨拶



小平氏 表彰

藤岡委員  
ビデオメッセージ

百瀬委員 報告



長谷川委員 報告



三宅委員 報告



菱田顧問 挨拶



小林国際部長 挨拶



林常務理事 挨拶

井上氏 表彰  
(賀詞交歓会にて)野崎氏 表彰  
(賀詞交歓会にて)

宅 丈雄委員（早稲田大学）より、各セッションのスコープ、講演内容、質疑応答の概要、ならびに会議後の活動状況について報告が行われました。

また、菱田公一氏（日本工学アカデミー顧問）、小林治氏（国立研究開発法人科学技術振興機構国際部部长）林秀樹氏（日本工学アカデミー業務理事）よりご挨拶を賜り、最後に所よりJAFOE2027のご案内・挨拶を行い閉会となりました。

本シンポジウムは、日米の運営委員長が主導し、4つのテーマおよび各セッションの運営委員を決定したうえで、各運営委員がセッションのスコープや講演者を選定する形で構成しております。今回も、各運営委員長が魅力ある登壇者を招聘したことにより、優れた講演の聴講にとどまらず、非常に有意義で活発なディスカッションが行われました。その結果、日米の異なる分野の研究者間におけるリレーション構築の貴重な機会となったとの報告がありました。本報告会では、こうした連携を今後さらに活用していくための支援体制構築の必要性を、改めて確認いたしました。

最後に、会場にご出席いただいた会員の皆様ならびにオンラインでご参加いただいた皆様に、この場を借りて心より御礼申し上げます。

2026年にはFoE Japan、2027年の事前勉強会に続き、同年7月には静岡県三島市の東レ総合研修センター（予定）にて、運営委員長に松原 崇充委員（奈良先端科学技術大学院大学）を迎え、JAFOE2027を開催予定です。実行委員会といたしましては、今後も一層努力してまいりますので、引き続き皆様のご支援とご協力を賜りますようお願い申し上げます。



## 2026年賀詞交歓会報告

企画運営会議委員長代理 城石 芳博 / YOSHIHIRO SHIROISHI

昨年続き、対面での賀詞交歓会が、2026年1月15日（木）13:00～14:45 ホテル 東京ガーデンパレス 2F「天空」において開催され、正会員43名（うち、新入会員2名）、客員会員5名（うち、新入会員4名）賛助会員11社20名、事務局OB1名の計69名の参加があった。賀詞交歓会は林常務理事の総合司会で始まり、まず安西祐一郎 会長から、多くの方にご参加いただいた御礼と、変革を迎えつつある新年にあたり皆様のご健康・ご多幸を祈念したい旨の年頭挨拶が述べられた。続いて、計11回を数える政治家と科学者の対話の会に当初からご参加いただいている、前環境副大臣 小林史明 衆議院議員から「科学技術・イノベーション、人材育成の重要性とEAJへの期待」に関する日本の将来を見据えた力強い来賓挨拶があった。さらに小林喜光 名誉会長からは、「EAJのパーパスである Engineer the Future で明るい未来の実現を期待する」との祝辞が述べられた。その後、スパークリングワインによる乾杯の音頭で、広い会場での対面な



林秀樹 常勤常務  
理事の司会



安西祐一郎 会長の  
年頭挨拶



前環境副大臣 小林史明  
衆議院議員の来賓挨拶



小林喜光 名誉会長の  
祝辞と乾杯の音頭



賀詞交歓会会場の様子



和やかな歓談の様子



安西会長、小林名誉会長と  
新入個人会員・新入賛助会員



岸本喜久雄 会長代理の  
閉会挨拶

らでの和やかな歓談が開始された。

暫しの歓談に続いて、安西祐一郎 会長から、国際活動において格別なご貢献をいただいた方々へ感謝を込めた、理事が選ぶ事業貢献表彰（賞状・記念品授与、写真撮影）、日米先端工学シンポジウムの“JAFOE BEST SPEAKER AWARD”と“Most Interactive Presenter Award”表彰（賞状授与、写真撮影）、新入個人会員・新入賛助会員の名前紹介と集合写真撮影が行われた。

続いて和やかな懇談となった。和やかで話の尽きない歓談、意見交換の最中ではあったが、予定の時間となり、最後に、岸本喜久雄 会長代理から、ご参加くださった方々のお陰で有意義な対面賀詞交歓会となったことへの御礼と、シンガポールなどのように産学連携で更なる活性化をめざす年としたい旨の、中締め挨拶があった。会費制、短時間での開催ではあったが、対面での賀詞交歓会は、名残を惜しみつつ閉会となった。変革の時代にあって、EAJのパーパスの実現に向け、引き続きEAJ事業の活性化にご高配を賜りたい。



## 第12回 政治家と科学者の対話の会（結果概要）

政策共創推進委員会委員長 永野 博 / HIROSHI NAGANO

日 時：2026年3月3日（火） 16時00分～17時30分

場 所：衆議院第二議員会館 第一会議室

話 題：工学と女性（情報学・工学分野における女性参画、地方における理工系女性のキャリア設計）に向けたアカデミアの取組みに関する話題提供とそれを踏まえた討論による政策共創

参加者：71名（議員7名、議員以外64名）

大野敬太郎議員（衆・自民）、大串正樹議員（衆・自民）、三浦信祐議員（参・公明）、赤松健議員（参・自民）、山本左近議員（衆・自民）、浅野哲議員（衆・国民）、河西宏一議員（衆・中道）

話題提供者（行木ジェンダー委員会委員長）

政策共創推進委員会（永野委員長、長井副委員長、大倉委員、小泉委員、牧原委員、庄司委員 他）、  
政策共創プラットフォーム（高木委員長、池田委員、白川委員 他）

安西EAJ会長、五十嵐副会長、菱田顧問、尾崎会員、山本会員、他 EAJ 会員（賛助会員2社含む）  
国会事務局、国立国会図書館、内閣府、文科省、メディア関係者 等

#### 概要：

はじめに、山本議員、河西議員から、今回のテーマが核心を突いたものであること、政治家が解決策を見いだしていくためにもアカデミーの皆様と領域を超えた対話が必須であることなどの挨拶がなされた。また、大野議員から、この会の重要性の認識を強くしているとの挨拶が行われた。

話題提供として、行木EAJジェンダー委員長から、昨年2月の緊急提言に基づき、①統計データの整備の必要性、②第三者も含めた客観的調査の必要性、③初等教育から企業による採用まで一貫通した体制やロールモデルの提示の必要性、を三つの骨子として報告がなされた。

討論においては、海外研究所の事例（浅野議員）、インテリジェント機能や安全保障研究の重要性（大野議員）、国際社会とのギャップ（大串委員）、デジタル技術による女性活用の促進（三浦議員）、物語性の必要性（赤松議員）、F1界における女性ストラテジストの活躍（山本議員）、などに関して発言があり、意見交換が行われた。また参加会員等からは、女性が成長分野をリードできる雇用ルートづくりの提案、女性を活用しないことが国損であるとの指摘、地域における情報系人材のニーズとそれを踏まえた地域戦略の必要性、女性活躍の事例として人工衛星おおすみの軌道計算の紹介、理系の国語力不足の指摘、などに関する発言があった。

その後、山本会員から、本年1月にとりまとめられたJST研究開発戦略センターの戦略プロポーザルについて紹介があった。

最後に、三浦議員から、課題解決のためにはナラティブ作りが重要であること、若い世代が海外を見てジェンダー課題を取り除くことが当たり前と考える土壌を作り我々がそれをバックアップしていくことが重要であること、貴重な機会に感謝するとともに引き続きこういう機会をもちたいことなどの閉会挨拶がなされた。



参加議員（左から、山本議員、赤松議員、三浦議員、大野議員、浅野議員）



会議風景

## 新入正会員のご紹介

(2026年2月入会者)

### [第1分野]

ながい にろう  
永井 二郎



福井大学学術研究院工学系部門 教授、工学系部門長

1966年丙午生まれ。東京大学大学院工学系研究科博士課程中退後、1993年福井大学工学部機械工学科助手。その後一貫して福井大学にて勤務し、2013年教授。2023年から2年間、副学長（国際・グローバル戦略担当）を務め、2025年より工学系部門長（兼 工学部長、工学研究科長）。

専門は伝熱工学。特に沸騰熱伝達を専門とし、高温面急冷開始点（クエンチ点）の解明や、沸騰熱伝達データベース構築と機械学習予測を行っています。エネルギー有効利用社会の実現に少しでも貢献できればと考えています。

### [第3分野]

ごとう たくや  
後藤 琢也



同志社大学 副学長

1994年京都大学大学院工学研究科修士課程修了。同年、同研究科エネルギー応用工学専攻にて日本学術振興会特別研究員（DC1）として研究に従事。1997年慶應義塾大学助手、京都大学助教等を経て、現在は同志社大学理工学部教授、副学長・研究開発推進機構長。京都大学博士（エネルギー科学）。熔融塩・イオン液体・プラズマを基盤に、CO<sub>2</sub>資源化、宇宙資源エネルギー開発（ISRU）、未利用排熱活用の研究を推進。産学連携型教育と起業家育成にも取り組んでおります。日本工学アカデミーの分野横断的な議論と連携を通じ、我が国の工学人材の育成と社会実装の推進に微力ながら貢献できればと存じます。どうぞよろしくお願ひ申し上げます。

### [第8分野]

おりと ふみお  
折戸 文夫



SolOrito 事業開発 代表

1980年3月に東京工業大学大学院材料科学専攻修了後、三菱化成工業に入社し、2012年3月まで化合物半導体、光ディスク、LED照明等に従事。その後、2018年3月まで三菱樹脂で高機能フィルム・無機材料、植物工場等の事業を推進。2018年より、（国研）農業・食品産業技術総合研究機構の事業開発担当理事として、農業界への成果の普及、及び民間企業との連携による社会実装に従事。2022年4月より、コンサルタントとして活動。この間、国際標準化に係る国内外委員会に参画、京都大学客員教授、東北大学特任教授、UCSB SSLDC Advisory Borad Member等を歴任し、産学官連携及び海外活動に係る豊富な経験を有する。日本工学アカデミーを核とする連携の輪を充実させ、広げるための活動に参画したいと考えています。どうぞよろしくお願ひいたします。

## 新入客員会員のご紹介

(2026年4月入会者)

### [第1分野]

リ グンキ  
李 軍旗



フォックスコン・インダストリアル・インターネット株式会社 取締役

1969年生まれ。1995年に国費留学生として来日し、1999年に東京大学大学院産業機械工学専攻にて博士号を取得。高知工科大学講師、日本ファインテック株式会社主任研究員を経て、中国フォックスコン・インダストリアル・インターネット株式会社代表取締役会長等を歴任。現在は同社取締役を務めるとともに、東京大学客員研究員および高知工科大学客員教授を兼務。

精密機械加工、知的生産技術、産業用IoT・AI分野における研究開発と産業応用に長年取り組んできた。16万rpmを超える超高速加工機や、機上計測機能を備えたナノレベルの超精密加工機の開発に携わり、その成果は電子製品の大規模生産現場に展開されている。これらを基盤として構築されたスマート工場は、世界経済フォーラム（WEF）のライトハウス工場として評価され、世界中に普及している。

今後はEAJの一員として、国際的視点から日中両国の産学連携の深化に寄与するとともに、AI時代における人材育成にも貢献していきたい。

### [第2分野]

ケイ ウセイ  
計 宇生



国立情報学研究所 名誉教授

1984年に東京大学工学部電子工学科を卒業し、1989年に同電気工学博士課程を修了。工学博士。1990年に学術情報センター助手、同助教授を経て、2000年から国立情報学研究所助（准）教授、教授。2002年より総合研究大学院大学併任。2026年3月に国立情報学研究所を定年退職し、同名誉教授。専門分野はネットワークアーキテクチャ、無線資源管理、通信サービス品質制御、およびモバイルコンピューティングであり、EAJにおける工学および科学技術、特に情報通信技術の発展に利する提言発信、国際連携、および人材育成活動を通して、社会に貢献していきたいと考えています。

### [第3分野]

シ セキ  
史 蹟



東京科学大学物質理工学院 教授

1997年に東京工業大学大学院理工学研究科金属工学専攻において博士号を取得後、電気通信大学電子工学科助手に着任した。2002年に東京工業大学へ移り、助手、助教授（後に准教授）を経て、2012年より現職を務めている。専門分野は金属物理学であり、主としてナノ構造を有する機能性材料の研究に取り組んできた。新規な構造設計およびプロセス開発を通じて、優れた物性を有する薄膜材料の創成を実現するなど、研究成果を挙げている。これまでにトップレベルの国際学術誌を含め、180編以上の学術論文を発表している。さらに、企業との共同研究や学術指導を通じて産学連携を推進し、社会への成果還元にも積極的に取り組んでいる。教育面においては、これまでに20数名の博士課程学生を指導するとともに、大学の国際連携教育の推進にも貢献している。

マ テイレイ  
馬 廷麗



### 九州工業大学大学院生命体工学研究科 教授

1999年に九州大学大学院博士前期課程および後期課程を修了後、同大学で助教、産業技術総合研究所にて博士研究員を務めました。2007年に大連理工大学教授に就任し、2013年に九州工業大学へ着任しました。これまでナノ材料、太陽電池、蓄電池分野の研究に従事し、現在は特にペロブスカイト太陽電池に関心を持ち、社会実装を見据えた研究を推進しています。EAJでは異分野交流を通じて視野を広げ、国際的に活躍できる研究者となることを目標としています。

### [第7分野]

ドン チイエン  
董 倩



### 徳島大学 客員教授、中国青島大学 教授

1963年生まれ、徳島大学外科の留学を経て、1992医学博士。かつて青島大学附属病院小児外科教授および病院長を務めた。長年、精密小児外科およびデジタル医学における医工連携のイノベーションに携わっている。子ども肝胆膵に基づくコンピュータ支援手術システムを開発、臓器や病変の3D再構築、最善の手術計画を可能にする。1万3000例のデジタル肝臓データを収集し、世界最大の「ヒトデジタル肝臓データベース」を創設、新たな肝セグメント分類「Dong's Liver Classification」を提唱し、肝手術のリスク評価に重要な貢献を果たした。徳島大学客員教授として日中医学交流を推進、多国の国際共同研究をリードして、小児肝臓腫瘍精密手術国際臨床ガイドラインを発表。国際友好推進により2021年外務大臣表彰を受賞。また、世界初豚肝臓解毒技術で日本を含む12カ国特許を取得、機能性健康食品を開発。200編以上の論文（SCI 96編）と《小児肝胆外科学》《小児腫瘍外科学》など著書を発表しています。

# INFORMATION



相磯 秀夫 会員  
2025年9月7日逝去 93歳

謹んでご冥福をお祈り申し上げます。

元東京工科大学学長、慶應義塾大学名誉教授  
1987年 EAJ入会  
情報技術分野の黎明期より活躍  
(日本初のトランジスタ式コンピュータを開発)



弘岡 正明 会員  
2025年12月1日逝去 94歳

謹んでご冥福をお祈り申し上げます。

テクノ経済研究所代表  
1988年 EAJ入会  
技術革新の本質と経済発展との相関性の解明



三井 恒夫 会員  
2025年12月28日逝去 99歳

謹んでご冥福をお祈り申し上げます。

元東京電力株式会社最高顧問  
1987年 EAJ入会  
電力技術開発に貢献



## 寄附者ご芳名

(2025年4月～2026年3月の間にご寄附いただいた方)

匿名(会員) 一般寄附金 20口

匿名(非会員) 一般寄附金 100口

ご寄附によるご支援に、心より感謝申し上げます。

公益社団法人日本工学アカデミーの財政基盤強化のために、寄附については是非ご協力をお願いいたします。  
なお、公益社団法人への寄附行為が認められた寄附者は、税制面での優遇措置が受けられます。

## 公益社団法人日本工学アカデミー 第14回〈通算第30回〉定時社員総会開催のご案内

会員各位

本会第14回〈通算第30回〉定時社員総会を下記の通り開催する予定です。総会後にはEAJフォーラムを計画しております。後日、詳細をご案内いたします。

記

第14回〈通算第30回〉定時社員総会（オンライン予定）

日 時：2026年6月4日（木） 13:00～13:45（予定）

事業貢献賞表彰式・EAJフォーラム2026（対面・オンライン配信）

日 時：2026年6月4日（木） 14:30～16:00（予定）

開催場所：ホテル東京ガーデンパレス

・事業貢献賞表彰式

・EAJフォーラム2026 「第7期科学技術・イノベーション基本計画」

基調講演 宮園 浩平 内閣府 総合科学技術・イノベーション会議 常勤議員

以上

### 編集後記

「暑さ寒さも彼岸迄」と言いますが、ウィーンでも最高気温が16度とか18度になるようになり、そろそろ春の訪れを感じるころです。今回も充実した記事が各方面から集まり、広報委員長としても嬉しい限りです。

と言っても、今この瞬間には、私は仕事でシエラレオネに来ており、当地の Chief Minister を始めとする閣僚と産業振興のための政策対話を行っています。気温は26度から28度。朝夕は海風で涼しいのですが、昼間はやはり暑いんですね。

この国は、若年層の識字率がようやく6割弱（UNESCOの2013年データ：古いですが）、5歳児までの乳幼児死亡率が101/1000（UNICEFデータ）というところです。Chief Minister自身はMIT Media Lab出身でBio-mechatronics のPh.Dを持っていますが、さすがにこの状況では、基礎教育や保健衛生のところからやらないと産業振興には繋がりません。日本の昔の人たちは偉かったなあーと改めて思う次第です。

国際機関というのは面白いところで、今回はマクロ経済分析担当、技術協力プロジェクト担当、それに私の3人で訪問しましたが、私のプレゼンについては求めなければ誰も意見を言いません。他の次長・局長連中は部下に作らせているようですが、私は昔から自分の講演資料は全て自分で作る主義なので、やり放題です。今回は、UNIDOの取組に加え、日本の地方国立大学の起源や特色（教育学部と医学部と工学部が地域の経済成長と社会開発を支えた、という勝手な解釈）、産総研（の前身）や農研機構（の前身）、地方公設試が日本の産業に与えたインパクト、等を発表したところ興味津々の様子でした。ま、この国ではそれをやろうにも人材もおカネもなく、なかなか難しいんですがね。それではまた次回。 （広報委員会 委員長 安永 裕幸）